

平成 30 年度日野市青少年薬物乱用対策推進本部会議 議事録要旨

日時:平成 30 年 11 月 15 日(木)14:00~15:30

場所:日野市防災情報センター1階 災害対策本部室

出席者:20名(1名欠席)

本部員(日野市) 10名(1名欠席)

関係機関 8名(東京都立多摩総合精神保健福祉センター、日野警察署、日野消防署、
南多摩保健所、東京都薬物乱用防止推進日野地区協議会)

市内団体 2名(東京日野ライオンズクラブ)

次第: 1. 開会

(1)市長挨拶

- ・本会議も今年で5年目になった。
- ・関係機関や関係団体にお集まりいただいて、顔の見える関係づくりのために毎年 1 回は開催してきた。
- ・定例会のほかに、緊急事態が起こればこの会議を招集することになっているが、幸い今までそのような事態は生じていない。
- ・今回は東京都立多摩総合精神保健福祉センター広報援助課山田統括課長代理をお招きしてセンターでの取り組みについてご紹介いただく。
- ・危険ドラッグについては、当局の取り締まりが功を奏し、減少傾向にあるが、潜在化しているとも聞く。
- ・大麻については、増加しており、29 年度は過去最大の検挙数になった。覚醒剤に比べて大麻を軽視しているという報告もある。
- ・この会議により市と関係団体が顔の見える関係を構築し、有事の際には連携ができるようにしたい。

(2)健康課長より

- ・本会議は、青少年を薬物乱用の被害から守り、健全な育成のために市と関係機関が情報交換を行えるよう平成 26 年度から開催してきているもので、それぞれ顔の見える関係づくりの一助にしてほしい。

(3)自己紹介

関係機関、市内団体、本部員の自己紹介

次第: 2. 日野市を取り巻く薬物乱用の現状

(1)日野警察署より

- ・全国では非行少年は減少傾向。但し、振り込め詐欺や窃盗犯については増加傾向にある。
 - ・小学生の万引きは増加している。
 - ・平成 29 年度の薬物事犯では、大麻が増加している。
 - ・平成 30 年度の日野警察署管内では、大麻及び覚醒剤で 1 名ずつ少年を検挙している。(※2 人とも日野市民ではない)。別件の捜査の際に発見したもの。
 - ・薬物の入手経路は職場の先輩や知人からが多い。
 - ・警察では教育委員会や学校との連携により防犯教室やセーフティ教室などで啓発に努めている。
- 今後も連携して薬物乱用の恐ろしさを伝えたい。

(2)日野消防署より

- ・日野地域においては、ここ2年では少年の薬物搬送事案は 1 件もない。大人についても管内では事案はない。
- ・日野署では救急車が3台。10,000 件近く出動しているうちの日野市内については 8,000 件で残りは近隣地域に出動している。
- ・都心部では、まれに薬物乱用による事案がある。消防は人命救助が優先なので、重症者は速やかに搬送する。薬物の使用がわかれば警察に連絡するが、まずは搬送を優先する。
- ・月に 1, 2 回は向精神薬などの大量服薬事案がある。日野の管内でもまれに発生している。
- ・引き続き関係機関と連携しながら取り組んでいきたい。

(3)南多摩保健所より

- ・南多摩保健所では、日野市を含めた管内で取り組みを行っている。
- ・年2回、主要駅にポスター掲示を実施。京王線では、高幡不動駅に掲示。
- ・保健所だよりに薬物乱用防止に関する記事を掲載している。
- ・各市や各地区の薬物乱用防止推進協議会、薬剤師会などが実施する啓発活動における啓発資材の貸し出しを行っている。
- ・春に自然発生したケシを抜去している。日野市内でも実績がある。一度抜去した場所については3年間は必ず確認をしている。
- ・7月に5市の連絡会を開催した。今年はNPOの薬物依存者家族会連合会の方による講演を実施。
- ・国の薬物乱用対策推進会議が8月に第5次の戦略を策定した。都も今年度改訂する予定。11/15に推進会議幹事会で原案を出し、12/3の薬事審議会で確認、2月に本部会議で決定し、都民に周知予定。
- ・東京都の薬務課が実施している薬物乱用の推進プランへの意見や、取組みに協力するという活動も行っている。

(4)東京都薬物乱用防止推進日野地区協議会より

(地区協議会全体としての活動について)

- ・市のイベント時における啓発活動、中学生による啓発ポスター及び標語の募集や展示会の開催、学校における薬物乱用防止教室などの活動を行っている。
- ・今年は、中学校の生徒 1 名が標語部門で都の優良賞を受賞した。
- ・東京都のポスター・標語募集事業では、学校ごとの応募数で率先校に選出される。日野市では 3 校だったので、ぜひ全校が選出されるよう期待している。
- ・ポスター展示会を 12 月 21 日から 12 月 26 日の休館日を除く5日間で開催するので見に来てほしい。
- ・産業まつりでは、昨年に引き続いてライオンズクラブと共同出展した。市民フェアでは大学生のボランティアと一緒に参加することができ、大学生も勉強になったようだ。
- ・イベントの際に薬物経験者らしき方が訪れたことがあった。どのように話をすべきか迷った。

(薬剤師による学校における薬物乱用防止教育について)

- ・学校薬剤師として環境衛生に携わっている。なぜ薬が必要か、どんなときに使うのかなど、健康な心と体をもつことが大事と教えている。
- ・薬物が脳に与える影響や、薬を使う際に考えてもらいたいこと、スポーツファーマシーの話、毒劇物の話などについて指導をしている。

(保護司の関わりや活動について)

- ・保護司として薬事犯と関った経験はないが、保護司の研修で薬事犯の内容について勉強する予定がある。
- ・薬防協の指導員としては、市のイベントで啓発チラシの配布に参加。
- ・更生保護女性会の研修で羽田の税関で開催されたものに参加した。麻薬・覚醒剤についても税関の役割について学んだ。

(民生委員の関わりについて)

- ・民生委員は専門的知識がないので啓発が中心。
- ・薬防協のイベント活動では、保護者や子どもに説明をした。

・ポスター・標語の募集事業については、関心のある学校とそうでない学校の差があるので、全ての学校に関心をもってもらいたい。

(5) 東京日野ライオンズクラブより

- ・ライオンズクラブで薬物乱用防止委員会認定講師を担当している。
- ・委員会の設置以降 15 年の間で、のべ 115 校、生徒 14,000 人、保護者 1,200 人に講義を実施してきた。教室では、前半でDVDをみてもらい、後半で質疑応答を行っている。そのうえで感想文を書いてもらっている。
- ・近年は、薬物乱用者の低年齢化が言われており、薬物乱用防止教育の大切さを感じている。
- ・認定講師の高年齢化と人数の減少が課題である。
- ・昨年の産業まつりから引き続き薬物乱用防止日野地区協議会と共同出展して、PRを行っている。来場者には、薬物乱用防止の大切さを知ってもらえたと思う。
- ・市内の小中学校で薬物乱用防止教室を実施しているが、講師としてライオンズクラブが呼ばれるかについては、各学校の判断となる。この点では学校ごとの認知の差を感じている。

次第： 3. 東京都立多摩総合精神保健福祉センターにおける薬物依存症再発防止への取り組みについて

(東京都立多摩総合精神保健福祉センター広報援助課山田統括課長代理より)

- ・薬物を使ってしまった人・使いそうな人やこれからやめたい人を対象に相談と再発防止プログラムを行っている。
- ・多摩のセンターでは、重点相談として特に①アルコール、薬物、ギャンブルなどの依存症と②ひきこもり(思春期・青年期、高齢者)に注力している。
- ・相談のほか、家族教室と本人を対象としたプログラムを実施している。まずは電話相談を行い、予約により個別相談を実施し、家族教室や本人へのプログラム実施につなげている。
- ・精神保健福祉相談のうち薬物関連については25%ある。
- ・依存の種類では、ギャンブルが増えている。シンナーなどの有機溶剤は減少。覚醒剤は20%で危険ドラッグは大幅に減っている。大麻については増えている印象。
- ・薬物・アルコール特定相談は 4 名の職員、専門職の相談員 3 名のほか、回復者 1 名で実施している。回復者とは、ダルクの職員で、八王子、相模原、川崎ダルクから来てもらっている。午前は個別相談、午後に家族教室と再発プログラムを行っている。
- ・「自分で薬物の使用をコントロールできない」のが依存症。薬物の使用者は、自分はコントロールできていると思っている。しかし、やめられない。本人に依存症と自覚してもらうことが回復のスタート。
- ・薬物依存の問題では、家族を支援することが大事。本人から相談というのはあまりない。まずは家族から相談というのが多い。薬物依存者は優先順位が、薬・アルコール＞人間関係(親など)となる。薬物をやめ続けるためには、人とのつながりが大事。
- ・依存症の家族教室は毎週火曜午後実施している。教室は、①依存症は簡単にはやめられないという知識を身につけてもらう。②お金・仕事など家族に生じている問題を整理する。③回復へのコミュニケーション法を学ぶ。の 3 点を目的としている。回復に向けてまずは壊れてしまった家族関係を回復することを目指す。欧米の「クラフト」という手法を採用している。
- ・再発予防プログラム(TAMARPP)は毎週火曜日に実施。集団認知行動療法のこと。過去に薬物・アルコールの問題で困った経験があり、これから薬物・アルコールを使わない生活を送りたいと願っている人を対象に実施。3, 4 名のスタッフに加えてダルクなどの回復者スタッフも参加する。29 年度は 45 名の対象者にのべ 470 名の参加で 51 回開催した。TAMARPPの紹介経路は知人・家族からが多い。初回では薬物の脳への影響と引き金と渴望について学ぶ。自分はどういうときに薬物を使いたくなるか考えてもらい、それを避けることを学ぶ。回復者の話はよく聞いてくれるので、プログラムには回復者の話を入れるようにしている。
- ・センターと関係機関との連携について、診療については、国立精神医療研究センターと町田にある北里東病院と連携している。薬物依存に対処する際に、向精神薬などを病院できちんと処方し、治療するという点で病院との連携は大切である。
- ・東京保護観察所立川支部と協定を締結している。保護観察期間中は立川支部でもプログラムを実施し、期間終了後はセンターでプログラムを実施している。保護観察期間が短い場合は、はじめか

らセンターで実施ということもある。

・依存症の再発防止の取り組みでは、対象者を地域のネットワークで支えるのが大切である。ネットワークには様々な機関があるが、この中のどこかにつながっていることが回復につながっていく。このことから複数で関わっていく必要がある。たとえ本人があるネットワークから外れてしまっても別のどこかに引っかかることができる。1 か所だけでは一度途切れたらそれまでになってしまう。1 回 2 回失敗しても見捨てないようにすることが大事。支援は数年単位で考えている。何かあればセンターに相談してほしい。

(質疑応答)

(問)薬物依存の治療として、抗うつ剤を使うというお話があったが、この抗うつ剤の乱用も心配。処方された薬の乱用につながりはしないか？

(答)市販薬や処方薬の依存は存在する。しかし、医師が処方しているものなので、それほど多くはない。

次第： 4. まとめ

健康課長より

・本会議は、青少年を薬物乱用の被害から守り、健全な育成を図るために、市と関係機関が顔の見える関係づくりを行えるよう、情報交換を行える場として1年ごとに開催しているもの。初の開催から4年目となるが、人事異動などで参加メンバーの入れ替わりもある。今後も定期的には開催していきたいと考えている。

次第： 5. 閉会

市長挨拶

・参加されたそれぞれの方から日頃の取り組みの内容や課題などご紹介をいただけた。
・東京都立多摩総合精神保健福祉センターの山田統括課長代理からは貴重なお話をいただき参考になった。貴重な社会資源があることをご紹介いただいた。必要があれば連携をお願いしたい。
・健康課長からもあったが、この会議は関係者の顔の見える関係づくりの場として毎年開催している。今後も年1回は開催していきたい。会議に参加していただいた方々が相互に連携、情報共有を図っていければと考えている。日野警察署からは実際に事件もあったとのことだった。いつ子どもたちが手を染めないとも限らない。今後ともよろしくお願い申し上げる。